つながり、広がる、新たな縁

「KM会」だけではなく、久野脇を取り巻くさまざまな人たちが、「縁結びの里」づくりの一翼を担っています。

自分自身のやりがいが、地域の元気につながる

大窪 成子 さん（静岡市駿河区）

久野脇区内の、大井川と茶園を眼下に眺めることができる民家の物干し場。大窪成子さんは、実家であるこの場所で、週末を中心に「縁カフェ」を開きます。

日本茶アドバイザーの資格を持つ大窪さんが、ワークショップ形式で久野脇産のお茶のおいしい飲み方をレクチャーします。昨年5月から始めて、すでに約630人のお客さんを迎えました。

「年老いていく両親に寄り添うこれからの時間を考えたときに、『ただ一緒にいるだけ』というのでは、私自身が続けられなくなる。だから、自分がここでやりがいを持っていける環境を、自分自身で創ろうと考えました」。

生まれ育ったここが好き。でも実際は、この地域について何も知らなかったことに気づいたという大窪さん。「まずはこの地域のお茶について、ちゃんと学ぼうと思いました」。日本茶アドバイザー資格取得に向けた勉強や、入会した手揉保存会での活動を通して、茶の魅力を体感していきました。

ちょうど縁カフェを始めようとしたとき、筒井さんからKM会に誘われました。「ここでお茶を飲んでもらうだけでなく、久野脇に散らばる『点』をつなぎ、『面』としてお客さんに提案する。それこそが、同じく久野脇の『点』のひとつである縁カフェが、久野脇の未来のためにできることだと考えました」。

大窪さんは今、縁カフェが目指す役割を「うちわであおぐこと」と表現します。「縁カフェを通して、外からの視点や評価をこの地域の中にあおぎ入れる。そしてぐるぐるとかき混ぜながら、明るい空気の流れをつくる。ここに住む人たちがその空気にふれることで、地域やお茶に対する誇りを強めることにつながればと思います」。

優しいイラストで広がる、地域の温かみ

古林 路子 さん（下泉区）
四男の和晄くん

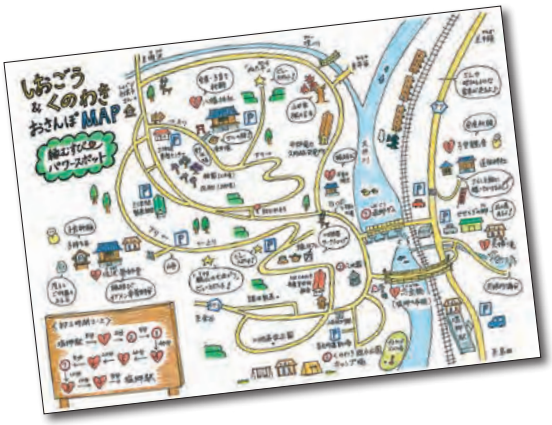
町観光商工課では、塩郷地区側の恋金橋付近と久野脇区のキャンプ場内の2カ所に、周辺の観光スポットを示した案内看板（イラストマップ）を設置します。

イラストを描いたのは、古林路子さん。川根本町の自然に魅せられ、5年前に家族とともに神奈川県から移住しました。

このマップの原画はもともと、KM会からの依頼を受けた古林さんが、キャンプ場の利用客に配布するための集落散策マップとして制作したものでした。「皆さんの地域を大切に思う気持ちに共感しました。絵を描くのは大好きなので、私のできることで皆さんの地域づくりのお手伝いができるならぜひ、と引き受けました」。

制作にあたっては、実際にKM会のメンバーと一緒に集落内を歩き、各スポットを紹介してもらいました。古林さんも、案内されるまではその存在も知らなかった所ばかりだったと言います。

「『よくここにシカが出るよ』という住民の方の話や、地元の人しか知らない『ぬた平』のような絶景などの地元ネタを盛り込んで、手作りで優しい雰囲気に作ることができたと思います。マップをきっかけに、観光客と久野脇区の皆さんとの間で新たな縁が生まれたらうれしいです」。



縁結びの里に、鐘は響き続ける

ＫＭ会が制作した「恋がねの鐘」。
取り付けられた鐘は、かつてこの地域にあった小学校で、活躍していたものでした。

「カーン――」。

７月のある土曜日。お昼前の久野脇の集落に「恋がね」の鐘の音が響き渡りました。鳴らしたのは、久野脇の子どもたち。

「実はこの鐘はね、昔この近くにあった久野脇小学校で、子どもたちに時間を知らせるために使われていたんだよ」。鐘の周辺に植えたヒマワリに水をあげながら、ＫＭ会の坂本さんが子どもたちに優しく話しかけます。

もともとは、業者に発注して鐘を設置するという案もあったと、ＫＭ会の皆さんが打ち合わせのときに教えてくれました。「もっと大きな架台を建ててもらって、イタリア製の立派な鐘を取り付けて（笑）。でも今は、『自分たちでイチから作って良かったな』ってみんなで言ってるよ」。「区民からも『ああ、懐かしい音だね』って言ってもらえて。何より僕ら自身が愛着を持って世話していけるからね」。

「少しずつですが、観光客が集落内を散策する姿を見かけるようになりました。意識的にその姿を探すようになったということもあるかもしれません」。筒井さんは話します。「子どもたちに観光客が多く訪れる様子を見せることで、自分たちが暮らしているこの久野脇が魅力あふれる所なんだということを知ってほしい。そして、大人がこの地域に誇りを持って楽しく生活している姿を、子どもたちに見せていきたい」。観光客と住民の縁を結び、住民同士の絆をさらに強くしていく、「縁結びの里」づくり。取り組みはまだまだ、道半ばです。

子どもたちが帰ろうとする頃、さっそく観光客が恋金橋方面からやってきました。少し離れた場所から鐘を興味津々に眺めているところに、水やりを終えたＫＭ会のメンバーが話しかけます。

「せっかくですから、ぜひ鳴らしていってください――」。